



疾走する

クを追って

なべのひと

うどんのたまご



疾走する

クを追って

なべのひと／
うどんのたまご



ゲームブックとフリーゲーム
うどんのたまご

疾走するクを追って

試し読み版

著者:なべのひと/うどんのたまご

イラスト:北街かな

※本ファイルの転載・複製・配布は禁止です。

製品版はこちらから



疾走するクを追って

目次

【疾走するクを追って】 3

一章	郵便配達は恋のベルを鳴らす	4
二章	ラザルと心の森	12
三章	帰郷	19
四章	△ —— 微増分	26
五章	白昼の大捕物	34
六章	夜の端に火は燃えて	48
七章	心の森、再び	54
八章	飛翔	68
九章	疾走するクを追って	78
一〇章	それぞれの『特別』	89

【玉座よ、僕の代わりに泣いてくれ】 103

一章	遠い戦場	104
二章	訃報	111
三章	師匠	119
四章	玉座よ、僕の代わりに泣いてくれ	125
五章	ラザル	129
六章	終幕	135

疾走するクを追って



一章 郵便配達は恋のベルを鳴らす

からんからんと高らかにベルを鳴らし、郵便配達がやってきた。僕は取るものも取らず家の外へと飛び出した。季節は夏。強い日差し。朝の爽やかな空気を胸いっぱい吸い込みながら、通りの四つ辻へと向かう。

郵便配達員の女の子が、郵便の到着を鳴らすベルを振っている。郵便を待ち受けていた近所の人たちが、彼女の前に列を作った。

僕の住む町の郵便システムは他の町とはちょっと変わっている。一軒一軒に郵便物を配られるのを待つのではなく、自分たちで取りに行くのだ。

なんでかって？

配達員が少なかった時代の名残だって僕は聞いている。昔は治安が悪くて、なり手も少なかったんだって。

そんなわけで、この辺の人たちはみんな、郵便を受け取るために列を作るのだ。僕は来る来る人みんなに順番を譲り、列の最後尾へと並んだ。

順番を待ちながら、僕は胸を高鳴らせた。

郵便は、いつも胸をわくわくさせてくれる。都会から毎月から送られてくる読み物の小冊子。文通相手から送られてくる将棋^{シヤチ}の次の一手。遠方にいる友達からの手紙。楽しみなものは、全部郵便が届けてくれるのだ。

そして最近は一もう一つ楽しみなものがある。

「今日は二通届いてますね。はいっ、差出もですね！ ええ、切手はこれで大丈夫です。いつもありがとうぐいします、お爺さん！」

テキパキとお客さんを捌く郵便配達員の女の子。まるで笑顔が真夏の太陽みたいに輝いている。

肩にかけた配達カバンに、郵便配達員のマークの入った小さな帽子。腕章にはトウエツトと名前が書かれている。頭の上の方で二つにくくった髪が、まるで垂れ耳の兎みたいだ。

かわいい。僕は自分の顔がほころびるのを感じた。

時間が許すならばいつまでも見ていたいぐらいの笑顔。

隣のおばさんが「うちの息子の嫁に欲しいわあ」と語るぐらいの百点満点な笑顔だ。

でも僕は知ってるんだ。

彼女の本当の顔はこれじゃないってことを。

僕が彼女の違う顔を知ったのは、点灯夫の仕事の真つ最中だった。

僕は古代帝国時代から伝わる、「漢字魔法」と呼ばれる魔法の使い手だ。

みんなは僕のことを「ヒ」の魔法使いつて呼ぶ。「ヒ」という読みの漢字を描くことによって魔法を使うからだ。使える魔法は干・日・氷・悲・飛、そして火。火の魔法を使って街道沿いの街灯を灯すのが、僕の仕事だ。

地味な仕事？ でも重要な仕事だ。

火をつけるだけの仕事に見えるけど、火の力が強すぎると街灯を壊してしまうし、弱すぎると朝になる前に明かりが消えてしまう。魔法使いとして一人前にならないと任せてもらえないぐらいには難しい仕事だ。

それに、点灯夫がいないと夜中に旅人が歩けない。南に向かう街道の中継地点であるこの街では火を灯すことはとても大事な事なんだ。

それから——実は僕にはもう一つ任せられてる重要な仕事があるんだけど……それは秘密だ。

話が逸れた。そう、話は三ヶ月前に遡る。

時は夕暮れ時だった。僕は魔筆——漢字魔法を使うための特殊な筆だ——を振るって「火」の文

字を書きながら、街道沿いの川べりの街灯をひとつひとつ灯していた。仕事は順調。時間にもかなり余裕があった。

——少し休憩しても大丈夫そうだな。

僕は堤防の護岸に腰掛けて、ぼんやりと川の流れを見つめた。夕日が静かな水面を真っ赤に照らしていた。そして、赤い光を背景に、影絵のように河川敷を走る黒い人影。僕の住んでる地区を郵便配達員だつてことはすぐにわかった。

いつもの兎みたいな髪がぴよぴよこゆれていた。

でもいつもと違うのは、表情。彼女は真剣な眼差しで前を睨んでいた。

彼女は懐から緑の寶石のはまった魔筆を取り出すと、ブーツに駆の文字を描いた。彼女は「グ」の魔法使いだつた。郵便配達員に多い、走る事を得意とする魔法使い。編み上げの革のショートブーツに書かれた「駆」の漢字がきらきらと輝いた。

彼女が地を蹴つた。「駆」が発動し、流れるように走り出した。

僕は息を飲んだ。

すごく綺麗なフォームだった。引き締まった太ももが躍動し、足が軽やかに動いた。

まるで空を滑るかのような、気持ちの良い走り。突風のような凄まじいスピード。そのまま風によ

うに、どこまでも走り去っていきそうだった。

そして——彼女はふいに不敵な笑みを浮かべた。

いつもの笑顔と全く違う、自信に満ちた笑顔だった。

あ、と僕の口から声が漏れた。

——そうか、これが本当の彼女なのか。

僕の心臓が、今までに感じたことのない音で鳴るのを感じた。まるで郵便の到着を告げるベルのよう。
うに。

僕は恋をしている。初めてだけど、恋をすると胸が高鳴るとか、見るだけで幸せな気分になるっていうんだから、きつとそっだ——。

* * *

「あの、君？ 次、君の番だよ？」

隣のおじさんに呼ばれて、僕ははっと気を取り戻した。

思い出に耽っているうちに、僕の番が来たみたいだった。

彼女が僕に向かって郵便物を差し出す。差出人は——封筒に書かれたマークで分かった。『ビ』の魔法使いたちの組合の会報。一番つまらない郵便物。今日は外れみたいだ。

しかし——そろそろ『あれ』が来てもおかしくない頃なのに。僕は彼女に聞いた。

「これだけ？　いつもの手紙は来てない？」

「お友達からですよね？　『シヨウ』の魔法使いの……」

「そう、ラザル。ラザル・ツルニ。今日もなし？」

「うーん……ちよつと待っててくださいいね〜」

彼女が配達カバンを（ごそ）そと漁った。返事は「無し」。

「そうか、残念」と僕は小さく肩を落とした。前の手紙には『今は暇だから、次の手紙はすぐ返せる』って書いてあったのに。一体どうしたんだらうか。

「大丈夫ですよ。ちよつと前に南の方で豪雨があつたつて話ですから、きつとそこで止まってるんですきつと、すぐ来ますよ！」

僕を氣遣つてか、彼女が元氣づけるように言った。

「そうか、待ち遠しいなあ……」

僕はしみじみと言った。楽しい郵便物は色々あるけれど、ラザルからの手紙は『特別』なのだ。僕

と正反対の人生を送っている彼の手紙はいつも、僕が一生見ることのないだろう景色を伝えてくれる。

手紙が来たら、一刻も早く受け取りたいんだけど。

あと、なんとかして彼女と仲良くなりしたい。

なにか良い方法はないだろうか——？

ふっと天から声が降ってくるように、僕の脳裏にある考えが閃いた。

南方からの手紙は夕方の郵便馬車で届くのだ。

つまりその時間以降に郵便局に行けば——もし届いていたらだけど——一足早く受け取れるかもしれない。郵便局に行けば彼女にも会える。うん、一石二鳥じゃないか！

「あの、トウエツトさん」

僕は彼女に向かって質問を投げかけた。

「手紙を郵便局まで取りに行くのって、あり？ もし手紙が届いてたら、その場で受け取れたりす

る？」

彼女は、どうだったかな、と思い出すように目線を上に空に向けた。

「一応、出来るはずですけど……」

「ほんと？　じゃあ毎日郵便局に行くよ！」

僕がそう言うと、彼女は頬に手をあてて考え込んだ。

もしかして迷惑だっただろうか？　それとも下心がバレただろうか？

僕は、冗談だつてごまかそうかと考える。けれど、僕が口を開く前に——彼女から意外な答えが返ってきた。

「わざわざ来るの、大変じゃないですか？　良かったら直接届けましようか？」

「えっ？　……いいの？」

「いつも夕方、川の辺りにいますよね？　お安いご用です！」

ありがとう、と言って僕は次の配達地点に向かう彼女を見送った。

かわいいだけじゃなくて、優しいだなんて、最高だなあ。

僕はびよびよ揺れる髪を見ながら、うっとりする。

でも、疑問がひとつ。

なんで僕が夕方にその辺にいるってこと、知ってるんだろう？

二章 ラザルと心の森

その疑問は、すぐに解けた。

なんのことはない。僕が彼女の練習を見ていたように、彼女も僕が街灯に火をつける姿を見ていたというだけだった。

その日の夕方。仕事前に川べりに立ち寄った僕に、彼女が手を振って話し掛けてきた。

「私の担当地区の人だなあって、ずっと思ってたんですよ」と彼女は言う。

覚えてもらえていたことに、僕は空に舞い上がりそうな気持ちになる。もしかして僕に特別な興味を持ってもらっていたりするのだろうか、と一瞬期待したんだけど。

「担当地区の人は全員、顔を覚えるようにしてるんですよ。ほら、覚えててもらえると嬉しいじゃないですか！」

残念なことに、そうではなかったみたいだ。

しかし——全員覚えるってすごいなあ、と僕は感心する。少なくとも僕には無理だ。人の顔を覚えるのは苦手ではないけれど、でも覚えたいとは思わない。

「トウエットさんは仕事熱心だなあ」

「んー。でも五ブロックぐらいですから、大したことないですよー？」

「そうかなあ……。面積的には確かにあまり広くないけれど、集合住宅が多い地区だから、大したことあると思うんだけど」

「そうですねー？ これぐらい当然ですってば」

当然と言いつつ、彼女は嬉しさが隠しきれないというような笑みを浮かべた。ちよつと自慢げな笑顔。仕事用の笑顔ではない笑顔だ。

ずつとこの表情を見ていたいな。

——と思ったのもつかの間。彼女はいつもの笑顔に戻ってしまった。

彼女は再び、仕事の話をする。

「ところで、手紙の件なんですけどー。局長の話だと、雨は止んだけど、川の水がなかなか引かないみたいですね。旅人も、ずつと足止めを食つてるみたいです」

「そっか、じゃあまだまだかかるとかな」

「でも、急ぎの手紙は空を飛べる魔法使いたちが運び始めてるって話ですから、もう二、三日だと思えますよー！ もう少しの辛抱ですー！」

体の前に握りこぶしを作って、トウエツトは言った。

そうか、あと二、三日か。

それを過ぎたらラザルからの手紙が来るかもしれない。

けれど、手紙を口実に彼女と話す機会が無くなると思うと、少し寂しかった。

「それにしても——」彼女が口を開いた。「毎日郵便局に行くよ！」だなんて。そんなに大事な手紙なんですか？ 現金書留とかならたまにいますけど……友達からの手紙でそんな事を言う人って、わたし初めて見ました！」

「ま、まあね……」

半分以上はトウエツトに会いたかったからなんだけど——。

でもまさか、そんな本音を言うわけには行かない。

だから僕は友達の話——ラザルの話をしはじめた。

ラザル・ツルニ。僕の友達。

「使えれば勝ち組」って言われるほどの希少で有用な魔法・「シヨウ」の魔法の使い手で、この街きって秀才だ。

あまりにも優秀なので、この街に置いておくのは勿体ないってことで中央の学校に進んだんだけど

そのあとちょっとした事件があつて、『悪の魔法使い』と戦う魔法戦士の養成学校に進路変更。そこを首席で卒業して、今は東大陸から来た『勇者』と一緒に「世界に希望をもたらす」ための旅をしている。そんな奴だ。

「いわゆる華々しいエリートつてやつですね！」とトウエットが言った。

「そうなるのかな……」僕は答えを濁した。

実際はそんなに華々しくない事を僕は知ってるんだけど。

でも今説明するのは『彼の手紙がどんなに待ち遠しいか』という話なので——詳しいことは省略することにした。

学校を卒業してから二年。ラザルはずっと『勇者』とともに旅をしている。

今は南方で、いさか諍いの原因になつている遺跡を探索して回っているらしい。

彼から送られてくる手紙は、僕をいつも驚かせてくれる。

人が乗れるほどの巨大な蝶。密林の滝にかかる五重の虹。古代遺跡の守護者である石人形との命がけの戦い。

まるで、雑誌に載つてる冒険譚みたいだろう？

でも本当にあったことなんだ。そんなフィクションみたいな世界にラザルはいて——定期的に僕に手紙をくれる。元氣だ。まだ生きてる、って。

「いいなあ……」話を聞いていたトウエツトが声を漏らした。

「私は『駆』ぐらいしかまともに使えないから、『冒険』とかあこがれちゃいますね」

「そういうの好きなの？」

「私、お姉ちゃんがいるんですよ。『カイ』の魔法使いで、船乗りをしてるんですけど。美人で、頭が良くて、気配りが上手で、仕事も出来て、そのうち船長になるんじゃないかって期待されて、すごいお姉ちゃんなんですー」

トウエツトは早口でまくし立てた。

「お姉ちゃんから航海の話とか聞くと、いいなああって思うんですよ。いいなあ、うらやましいなあって」

「その気持ちはちょっとだけわかるな。僕もラザルの手紙を読んで『いいなあ』って思うことあるよ」僕は共感を示して、そして何の気なしに聞いた。

「トウエツトさんは船には乗らないの？」

「船の上じゃ『駆』は使えないじゃないですか。私は『グ』の魔法使いだから、『駆』で輝いてみせ

るんです。私は陸で勝負するんですよ」

トウエットはきらりと答えた。

「すごいなあ、トウエットさんは」

僕は本心から感動してそう言った。

「自分の出来ることを最大限に生かそうとしてる人、尊敬するよ」

えへへと、トウエットが照れたように笑った。

「郵便局員には郵便局員のプライドがありますから！……でもラザルさんの話を聞いてると、ちょっと羨ましくなっちゃいますねー。私も『シヨウ』の魔法が使えたら、そんな冒険が出来たりするのかな、なんてね」

* * *

僕は彼女にせがまれて、夕方になるたびにラザルの冒険譚を語った。

トウエットは、ラザルの事を『華々しいエリート』って言っていた。

でも実際は真逆なんだ。

ラザルは、僕らの使う「火」や「駆」みたいな、『生活の役に立つ便利な魔法』は使えない。中央の学校に進んだんだけど、そこで何か辛いことがあって、ほとんどの魔法を使えなくなってしまったんだ。残っている魔法は禁忌とされてる攻撃魔法と、魔法を消す「消」だけ。そのせいでお父さんとケンカして、魔法で怪我を負わせて、『心の森』っていう遺跡に逃げ込んだんだ。

遺跡にある『銀の玉座』っていう、マジックアイテム遺物の力で鳥の怪物になっていたラザルの姿を僕は思い出す。人としての理性を失って、魔法で僕を攻撃してきた事を。もし一歩間違ったら僕が殺してたかもしれない。僕が助けなかったら、鳥になってどこかに飛んでいってしまったかもしれないんだ。

華々しく見えるラザルの進路は残された魔法だけで戦う道を模索した結果だった。勇者と行動を共にしてるのも『それ』しか見つからなかっただけで—— けっして『だれかに羨んでもらう人生を送るため』ではないんだ。

「ショウ」が使えるからっていつて、万能じゃない。

僕は、その話をもっと早く彼女にするべきだったんだ。

三章 帰郷

そして三日後。手紙は予定通りやってきた。

夕方の川べりで手渡された封筒は雨に濡れたせいで、べこべこになっていた。

「ありがとう」

礼は言うけど、言葉に力が入らない。手紙を口実に彼女と話せるのも今日までかと思うと、心の中に一足早い秋風が吹き込むような気分だった。

僕の顔を覗き込むように見て、彼女は言った。

「どうかしました？　なんだかあまり嬉しくなさそうに見えますけど……？」

「いや、そんなことないよ！　ありがとう！　ありがとう！」

僕は慌てて笑顔を作って、彼女から離れた。

まだ日没まで時間はあった。僕は石張りの護岸に腰掛けて、手紙を開封した。

手紙は雨に濡れていたが、幸い中の文字は無事だったようだ。

肉太で神経質な楷書が、便せんの上に綺麗に並んでいた。

『君へ

元気だろうか？ こっちは相変わらず暇だ。

問題が解決して、ここではしばらく僕みたいな奴の仕事はないらしい。

だから、今のうちにやりたいことをやっつけよ。折角だし、いったんそっちに帰るよ。

それじゃあ、また』

いったん帰る。

その単語に僕の心は踊った。前に会ったのはラザルが学校を卒業してすぐだから、だいたい一年半ぶりだ。

「いつ帰ってくるんだろう」僕は独りごちた。

「いつって……今だけだ」

なぜか後ろから、聞き覚えがある声が聞こえてきた。

びっくりして僕は振り返った。キリッとした眉の間に寄った眉間のシワ。いつも難しいことを考えてそうなへの字口。紫の羽織の下に着てる服こそ南方風の民族衣装だが、そこに立っているのは間違いない。手紙の主だった。

でも何かがおかしい。体中が草まみれになっている。まるで草むらで転んだみたいだ。僕の違い感なんかつゆ知らず、ラザルは気難しそうな声で言った。

「君の師匠からこの時間帯なら河川敷に居るって聞いてきた。一年と五ヶ月ぶりだな」
僕は引き気味に答えた。

「あのき……いくらなんでも、到着が早すぎない？」

「馬鹿じゃないのか？ 南方の豪雨についてはいくらなんでも郵便屋から聞いてるだろ？ 僕が早いんじゃないかって郵便が遅いんだよ」

いたずらっぽくにやりと笑って、ラザルは僕の隣に腰を下ろした。身体についた草を払って、ふうと小さく息を吐く。

しばらく見ない間に、ラザルは遅しくなっていた。最後に会った時に比べて肩幅も胸板も厚くなっていて、首の下だけまるで別人の身体をくっつけたみたいに見えた。

「毎日子ども二人分ぐらいの荷物を背負わされてあちこち走り回ってたからな。そりゃ体も鍛えられるよ。それに勇者さん、人使い荒いから……鍛えないと命に関わるんだ」

「命に関わるって、そんなに？」

「これぐらいなら当然出来るだろって無理難題押しつけるんだ、あの人。落ちると死にそうな崖みた

いな山を登れとか、ここから中央までの距離を入ひとり背負って一日で走れとか。暴言も酷いし、なんど胃液を吐いたことか……」

ラザルはゲンナリした顔で頷いた。

でもなんだか楽しそうだ。心の森に引きこもっていた時のような危うい陰はない。

僕はほっとする。元氣そうならよかった。

「ところで、そっちは最近どうしてた？」ラザルが僕に聞いてきた。

「点灯夫を任されてるよ。この辺の街道沿いの街灯を担当してる」

「街道沿い？ 魔法の制御が上手くないと任せてもらえない場所じゃないか。……すごいな」

「すごいだろ」ラザルをビックリさせた事が嬉しくて、僕は胸を張った。

街道沿いの街灯は古くて、それだけに扱いが難しい。僕は平々凡々な「ビの魔法使い」だけど、魔法の制御にだけは自信があるんだ。

「それともうひとつ、すごいがあるんだ」

僕は懐から名刺大の木札を取り出した。

『『心の森』の通行証だよ。これで、いつでも森の中に入れる。たとえ「封」の魔法がかかってもね」

銀の玉座の一件のせいでこの街の魔法使いでは僕が一番『心の森』に詳しくかった。本当なら僕ぐらい

の歳だと通行証なんて持たせてくれないんだけど、特別だ。

「これがあれば、いつ引きこもっても助けにいけるよ」

「いらぬよ。僕はもう森になんて行かない。二度と心に雨なんて降らせてたまるか。僕には『晴』があるんだからな」

そう言いながら、ラザルは何かを促すように空中をタップした。

——なるほど。

僕は魔筆を懐から取り出すと、『日』の文字を書いた。すかさず彼も『青』の文字を書く。宙に浮かぶ二つの漢字は光りながらくるくる融合して『晴』の魔法に変化した。空は晴れているから、効果は無いんだけども——でも僕たちは、秘密基地の場所を共有するみたいに笑いあった。

「ところで久々に会えたし、ご飯でも一緒に食べないか？ 帰ってきたら食べようと思ってたものが沢山あるんだ。付き合っってほしい」

「いつにはいつまで？」

僕の質問に、ラザルは手帳を開いた。ぱらぱらめくれるページの片隅に『帰ったら食べるものリスト』が書き付けてあるのがちらりと見えた。

「ええと、戻らないといけない日が……だから、ええと……あさっての昼の馬車で発つことになる」と

思っ」

「そっか……残念だなあ。明日と明後日は、夜勤なんだ。朝食ぐらいなら付き合えるんだけど」

「その件については大丈夫。君の師匠に根回しはしておいた」

と伝言の書かれた一筆箋を差し出される。

『明日と明後日の点灯番は代わっておくから、友達とゆっくりしておいで！』

ちょっと古めかしきを感じるかわいい丸文字。師匠の文字だった。

「持つべきものはいい師匠だな」

「なんだよその計画性……」

つつい、心の声が漏れて、聞いたラザルがにやりと笑った。

「じゃあ明日の昼前で待ち合わせでいいか？ 場所は図書館前で」

「もちろん」

と、話がまとまったところで、ちょうど良く夕方の鐘が鳴る。

そろそろ仕事に行かないと。僕はラザルに別れを告げようと立ち上がったところで――。

少し離れた場所から、トウエツトが僕らのことを見つめていたことに気づいた。

「あ……」

ばつの悪い顔をするトウエツト。

「あの、トウエツトさん……もしかして、話、聞いてた？」

「その、盗み聞きするつもりはなかったの。ほら、手紙、状態が悪かったじゃないですか。中身、大丈夫だったかなあつて思いました……あはは……」

そうだったのか。優しく、仕事熱心だなあ。

僕の頬がついだらしなく緩んだ。

ラザルが不思議そうな顔をして、僕とトウエツトの顔を交互に見ていた。そして、

「なるほどな」と難しそうな顔で、小さく呟く。

「え、何かなるほど……？」

そして合点がいったと言っかのように頷くと、ラザルは立ち上がってトウエツトに向かって言った。

「トウエツトさんって言ったっけ。僕たち、明日一緒に昼飯を食べる約束をしてるんだけど……何か

の縁だ、よかったら君もどう？」



ゲームブックとフリーゲーム
うどんのたまご

関連作紹介



【君はヒの魔法使い】

雨の降り続く奇妙な夏。

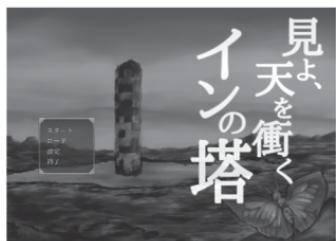
平凡な”ヒ”の漢字魔法使いである僕は、雨の原因が”心の森”に引きこもった同級生だと知る。

”心の森”にある古代のマジックアイテムは危険な力を秘めている。何があったか知らないけれど、とんでもないことになる前に連れ戻してやらないと——！

雨の森を探索するゲームブック風AVG。



△ ゲーム詳細は
こちらから



【見よ、天を衝くインの塔】

魔法戦士養成学校最後の夏休み。

人を傷つける魔法ぐらいしか使えず、学校でもてあまされていた僕は、“勇者”と呼ばれる男に雇われて、熱帯地方にやってきた。

仕事の内容は、インの塔と呼ばれる建造物の頂上とある魔法を使うこと。でも、雇い主の”勇者”は怠惰で口が悪くて、僕はろくに説明も受けないまま現場に放り込まれる。僕の初仕事、果たして上手くいくんだろうか？ マッピングメインのゲームブック風ADV。



△ ゲーム詳細は
こちらから